

伊藤左千夫 集
長塚節

本林勝夫 編

明治文學全集

54

伊藤左千夫
長塚節集

昭和五十二年六月三十日初版第一刷發行

著者

伊藤左千夫
長塚節

發行者

井上達三

東京都千代田區神田小川町二ノ八

發行所

株式會社 筑摩書房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話 東京二九一七六五一(代表)
振替口座 東京六一四一二三番
郵便番號 一〇一一九一

(分類) 0393 (製品) 10354 (出版社) 4604

Printed in Japan

目次

伊藤左千夫集

野菊之墓……………三

隣の嫁……………四

紅黄録……………五

奈々子……………五

去年……………五

提灯の繪をかく娘……………六

水害雜録……………六

三ヶ月湖遊記……………六

和歌……………六

續新歌論……………三

再び歌之連作趣味を論ず……………三

竹の里人……………四

『我が命』に就て……………五

強ひられたる歌論……………五

表現と提供……………五

『悲しき玩具』を讀む……………六

叫びと話……………六

叫びと俳句……………六

文明。茂吉。柿乃村人評……………六

長塚節集

芋掘り	一六五
開業醫	一七〇
おふさ	一七三
隣室の客	一七九
太十と其犬	一八〇
炭焼のむすめ	一八五
佐渡が島	一八六
和歌	一八七
寫生の歌に就いて	一九〇
文明。茂吉。柿乃村人評	一九九
齋藤君と古泉君	二〇六
長塚節氏の赤光評 (古泉千樫)	二二三

小説家としての伊藤左千夫

(宇野浩二) …………… 二〇一

伊藤左千夫より (土屋文明) …………… 二〇七

長塚節の歌 (齋藤茂吉) …………… 二〇九

長塚節素描より (若杉慧) …………… 二一五

解題 (本林勝夫) …………… 二二五

年譜 (永塚功・大戸三千枝編) …………… 二二九

参考文献 (永塚功・大戸三千枝編) …………… 二三三

伊藤左千夫集

半飼のうぬまを時よせ乃中の
あらたし事歌心ほせよ起るた

野菊之墓

後の月といふ時分が来ると、どうも思はずには居られない。幼ない譯とは思ふが何分にも忘れることが出来ない。最早十年餘も過去つた昔のことであるから、細かい事實は多くは覚えて居ないけれど、心持だけは今猶昨日の如く、其時の事を考へると、全く當時の心持に立ち返つて、涙が留めどなく湧くのである。悲しくもあり楽しくもありといふやうな状態で、忘れやうと思ふ事もないではないが、寧ろ繰返し繰返し考へては、夢幻的の興味を食つて居る事が多い。そんな譯から一寸物に書いて置かうかといふ氣になつたのである。

僕の家といふは、松戸から二里許下つて、矢切の渡を東へ渡り、小高い岡の上で矢張り矢切村と云つて居る所。矢切の齋藤と云へば、此界限での舊家で、里見の崩れが二三人竝へ落て、百姓になつた内の一人が齋藤と云つたのだと祖父から聞いて居る。屋敷の西側に一丈五六尺も廻るやうな椎の樹が四五本重なり合つて立つて居る。村一番の忌森で村ぢうから羨ましがられて居る。昔から何程暴風が吹いても、此椎森のために、僕の家許りは家根を剥がれた事は只の一度もないとの話だ。家なども随分と古い。柱が残らず椎の木だ。それが又煤やら垢やらで何の木か見別けがつかぬ位、奥の間の最も煙に遠いところで、天井板が丸で油炭で塗つた様に、板の木目も判らぬ程黒い。それでも立ちは割合に高くて、簡単な欄間もあり銅の釘隠なども打つてある。其釘隠が馬鹿に大きい雁であつた。勿論一寸見たのでは木か金かも知れないほど古びてゐる。

僕の母なども先祖の言ひ傳だからといつて、此戦國時代の遺物的古家を、大へんに自慢されてゐた。其頃母は血の道で久しく煩つて居られ、黒塗的な奥の間がいつも母の病褥となつて居た。其次の十疊の間の南隅に、二疊の小坐敷がある。僕が居ない時は機織場で、僕が居る内は僕の讀書室にしてゐた。手摺窓の障子を明けて頭を出す、椎の枝が青空を遮つて北を掩ふてゐる。

母が永らくぶら／＼して居たから、市川の親類で僕には縁の従妹になつて居る、民子といふ女の兒が仕事の手傳やら母の看護やらに來て居つた。僕が今忘れることが出来ないといふのは、其民子と僕との關係である。其關係と云つても、僕は民子と下劣な關係をしたのではない。

僕は小學校を卒業した許で十五歳、月を數へると十三歳何ヶ月といふ頃、民子は十七だけれどもそれも生が晚いから、十五と少しにしかならない。瘦きすであつたけれども顔は丸い方で、透き徹るほど白い皮膚が紅味をおんだ、誠に光澤の好い兒であつた。いつでも活々として元氣がよく、其癖氣は弱くて憎氣の少しもない兒であつた。

勿論僕とは大の仲好しで、坐敷を掃くと云つては僕の所をのぞく、障子をはたくと云つては僕の坐敷へ這入つてくる、私も本が讀たいの習習がしたいのと云ふ、たまにはハタキの柄で僕の背中を突いたり、僕の耳を摘まむだりして逃げてゆく。僕も民子の姿を見れば來い來いと云ふて二人で遊ぶのが何より面白かつた。母からいつでも叱られる、

又民子は政の所へ這入てるナ。コラアさつさと掃除をやつてしまへ。

これからは政の讀書の邪魔などしてはいけません。民子は年上の癖に……………

など、頻りに小言を云ふけれど、其實母も民子をば非常に可愛がつて居るのだから、一向に小言がきかない。私にも少し手習をさして……………なと、時々民子はだゝをいふ。さういふ時の母の小言も極つとる。

お前は手習よか裁縫です。着物が満足に縫へなくては女一人前として嫁にゆかれませむ。

此頃僕に一點の邪念が無かつたは勿論であれど、民子の方にも、いやな考などは少しも無かつたに相違ない。併し母が能く小言を云ふにも拘らず、民子は猶朝の御飯だ晝の御飯だといふては僕を呼びにくる。呼びにくる度に、急いで這入つて来て、本を見せるの筆を借せると云つては暫く遊でゐる。其間にも母の藥を持つてきた歸りや、母の用を達した歸りには、屹度僕の所へ這入つてくる。僕も民子がのぞかない日は何となく淋しく物足らず思はれた。今日は民さんは何をしてくるかと思ひ出すと、ふらふらと書室を出る。民子を見にゆくといふほどの心ではないが、一寸民子の姿が目にも觸れ、ば氣が落付くのであつた。何のこつた矢張り民子を見に来たんぢやないかと、自分で自分を嘲けた様なことが屢あつたのである。

村の或家さ替女がとまつたから聴きにゆかないか、祭文がきたから聴きに行かうのと近所の女供が誘ふても、民子は何かか斷りを云ふて決して家を出ない。隣村の祭りで花火や飾物があるからとの事で、例の向のお濱やお仙等が大騒ぎして見にゆくといふに、内のものらまで民さんも一所に行つて見てきたらと云ふても、民子は母の病氣を言ひ前に行かない。僕も餘りそんな所へ出るは嫌であつたから家に居る。民子は狐鼠々々と僕の所へ這入つてきて、小聲で、私は内に居るのが一番面白いと云つてニツコリ笑ふ。僕も何となし民子をばそんな所へやりたくなかつた。

僕が三日置四日置きに母の藥を取りに松戸へゆく。どうかすると歸りが晩くなる。民子は三度も四度も裏坂の上まで出て渡しの方を見てゐたさうで、いつでも家中のものに冷かされる。民子は眞面目になつて、お母さんが心配して見てお出で見てお出でいふからだと云ひ譯をする、家の者は皆ひそ／＼笑つてゐるとの話であつた。

さういふ次第だから、作をんなのお増などは、無上と民子を小面憎がつ

て、何かといふと、

民子さんは政夫さんとこへ許り行きたがる、隙さへあれば政夫さんにこびりついてゐる。

など、頻りに云ひはやしたらしく、隣のお仙や向ふのお濱等まで彼是噂さをする。これを聞いてか嫂が母に注意したらしく、或日母は帯になく六つかしい顔をして、二人を枕もとへ呼びつけ意味有り氣な小言を云ふた。

男も女も十五六になれば最早兒供ではない。お前等二人が餘り仲が好過ぎるとて人が彼是云ふさうぢや。氣をつけなくてはいけない。民子が年かさの癖によくはない。是からはもう決して政の所へなど行くことはならぬ。吾子を許すではないが、政は未だ兒供だ。民や十七ではないか。つまらぬ噂さをされるとお前の體に疵がつく。政夫だつて氣をつける……。來月から千葉の中學へ行くんぢやないか。

民子は年が多いし且は意味あつて僕の所へゆくであらうと思はれたと氣がついたか、非常に愧ぢ入つた様子に、顔眞赤にして俯向いてゐる。常は母に少し位小言云はれても随分だゝをいふのだけれど、此日は只兩手をついて俯向いたきり一言もいはない。何の疚しい所のない僕は頗る不平で、

お母さんそりや餘り御無理です。人が何と云つたつて、私等は何の譯もないのに、何か大變悪いことでもした様なお小言ぢやありませんか。お母さんだつていつもさう云つてぢやありませんか。民子とお前とは兄弟も同じだ、お母さんの眼からはお前も民子も少しも隔てはない、仲よくしろよといつても云つたぢやありませんか。

母の心配も道理のあることだが、僕等もそんなにやらしいことを云はれやうとは少しも思つて居なかつたから、僕の不平もいくらかの理はある。母は俄にやさしくなつて、

お前達に何の譯もないことはお母さんも知つてるが、人の口がう

るさいから、只これから少し氣をつけてと云ふのです。色青ざめた母の顔にもいつしか僕等を真から可愛がる笑みが湛へて居る。やがて、

民やあの又薬を持つてきて、それから縫掛けの袷を今月中に仕上げてしまひなさい。……政は立つた次手に花を剪つて佛壇へ捧げて下さい。菊はまだ咲かないか、そんなら紫苑でも切つてくれよ。

本人達は何の氣なしであるのに、人が彼是云ふので却て無邪氣でゐられない様にして終ふ。僕は母の小言も一日しか覚えてゐない。二三日たつて民さんはなぜ近頃は來ないのかわらんと思つた位であつたけれど、民子の方では、それからといふものは様子がからつと變つて終ふた。

民子は其後僕の所へは一切顔出ししない許りでなく、座敷の内で行逢つても、人のゐる前などでは容易に物も云はない。何となく極りわるさうに、まぶしい様な風で急いで通り過ぎて終ふ。據處なく物を云ふにも、今までの無遠慮に隔てのない風はなく、いやに丁寧に改まつて口をきくのである。時には僕が餘り俄に改まつたのを可笑がつて笑へば、民子も遂には袖で笑ひを隠して逃げて終ふといふ風で、兎に角一重の垣が二人の間に結ばれた様な氣合になつた。

それでも或日の四時過ぎに、母の云ひつけで僕が背戸の茄子畑に茄子をもいで居ると、いつのまにか民子が策を手を持つて、僕の後にきてゐた。政夫さん……

出し抜けに呼んで笑つてゐる。

私もお母さんから云ひつかつて來たのよ。今日の縫物は肩が凝つたらう、少し休みながら茄子をもいできてくれ、明日麴漬をつけるからつて、お母さんがさう云ふから、私飛できました。

民子は非常に嬉しさに元氣一パイで、僕が、

それでは僕が先にきてゐるのを民さんは知らないで來たの。

と云ふと民子は、知らなくつて。

にこ／＼しながら茄子を探り始める。

茄子畑といふは、椎森の下から一重の藪を通り抜けて、家より西北に當る裏の千菜畑。崖の上になつてるので、利根川は勿論中川までもかすかに見え、武藏一丞が見渡される。秩父から足柄箱根の山々、富士の高峯も見える。東京の上野の森だと云ふのもそれらしく見える。水のやうに澄みきつた秋の空、日は一間半許の邊に傾いて、僕等二人が立つて居る茄子畑を正面に照り返して居る。あたり一體にシンとして又如何にもハツキリとした景色、吾等二人は眞に畫中の人である。

マア何といふ好い景色でせう。

民子も暫く手をやめて立つた。

僕は茲で白狀するが、此時の僕は慥に十日以前の僕ではなかつた。二人は決して此時無邪氣な友達ではなかつた。いつの間にかさういふ心持が起つて居たか、自分には少しも判らなかつたが、矢張り母に叱られた頃から、僕の胸の中にも小さな戀の卵が幾個か湧きそめて居つたに違ひない。僕の状態がいつの間にか變化してきたは、隠すことの出來ない事實である。此日始めて民子を女として思つたのが、僕に邪念の萌芽ありし何よりの證據ぢや。

民子が體をくの字にかゞめて、茄子をもぎつゝある其横顔を見て、今更のやうに民子の美しく可愛らしさに氣がついた。これまでにも可愛らしいと思はぬことはなかつたが、今日はいし／＼と其美しさが身にしみたしなやかに光澤のある鬢の毛につゝまれた耳たば、豊かな頬の白く鮮かな、顎のく／＼しめの愛らしさ、顎のあたり如何にも清げなる、藤色の半襟や花染の袴や、それらが悉く優美に眼にとまつた。さうなると恐いもので、物を云ふにも思ひ切つた言は云へなくなる、羞しくなる、極りも悪くなる、皆例の卵の作用から起ることであらう。

茲十日許仲垣の隔てが出來て、ロク／＼話してもせなかつたから、これも今までならば無論そんな事考へもせぬに極つて居るが、今日は茲で何か話さねばならぬ様な氣がした。僕は始め無造作に民さんと呼んだけれど、

跡は無造作に詞が繼がない。をかしく喉がつかまつて聲が出ない。民子は茄子を一つ手に持ちながら體を起して、

政夫さん何に……

何でもないけど民さんは近頃へんだからさ。僕なんかすつかり嫌ひになつたやうなもの。

民子はさすがに女性で、さういふ事には僕などより遙に神経が鋭敏になつてゐる。さも口惜しさうな顔して、つと僕の側へ寄つてきた。

政夫さんはあんまりだわ。私がいづ政夫さんに隔てをしました……

……

何さ此頃民さんは、すつかり變つちまつて、僕なんかには用はないらしいからよ。それだつて民さんに不足を云ふ譯ではないよ。

民子はせきこんで、

そんな事いふはそりや政夫さんひどいわ。御無理だわ。此間は二人を並べて置いて、お母さんにあんなに叱られたぢやありませんか。

あなたは男ですから平氣でお出だけど、私は年は多いし女ですもの、

あア云はれては實に面目がないぢやありませんか。それですから、

私は一生懸命になつてたしなんで居るんです。それを政夫さん隔てるの嫌になつたらうのと云ふんだもの、私はほんとにつまらない……

……

民子は泣き出しさうな顔つきで僕の顔をじいっと視てゐる。僕も只話の小口にさう云ふたまでであるから、民子に泣きさうになられては、かはしさうに氣の毒になつて、

僕は腹を立つて言つたでは無いのに、民さんは腹を立つたの……

僕は只民さんが俄に變つて逢つても口もきかず、遊びにも來ないから、いやに淋しく悲しくなつちまつたのさ。それだからこれからも時々遊びにお出でよ。お母さんに叱られたら僕が咎を背負ふから……人が何と云つたつてよいぢやないか。

何といふても兒供だけに無茶なことをいふ。無茶なことを云まれて是子

は心配やら嬉しいやら、嬉しいやら心配やら、心配と嬉しいとが胸の中で、ごつたになつて争ふたけれど、とう／＼嬉しい方が勝を占めて終つた。猶三言四言話しをするうちに、民子は鮮やかな曇りのない元の元氣になつた。僕も勿論愉快が溢れる……、宇宙間に只二人きり居るやうな心持にお互になつたのである。やがて二人は茄子のもぎくらすする。大きな畑だけれど、十月の半過ぎでは、茄子もちらほらしかかつて居ない。二人で漸く二升許宛を採り得た。

まア民さん御覽なさい、入日の立派なこと。

民子はいつしか箆を下へ置き、兩手を鼻の先に合せて太陽を拜むでゐる。西の方の空は一體に薄紫にぼかした様な色になつた。ひた赤く赤い許りで光線の出ない太陽が今其半分を山に埋めかけた處、僕は民子が一心入日を拜むしほらしい姿が永く眼に残つてゐる。

二人が餘念なく話をしながら歸つてくると、背戸口の四つ目垣の外にお増がぼんやり立つて、こつちを見て居る。民子は小聲で、

お増が又何とか云ひますよ。

二人共お母さんに云ひつかつて來たのだから、お増なんか何と云つたつて、かまひやしないさ。

一事件を経る度に二人が胸中に湧いた戀の卵は層を増してくる。機に觸れて交換する雙方の意志は、直に互ひの胸中にある例の卵に至大な養分を給與する。今日の日暮は慥に其機であつた。ぞつと身振ひをする程、著しき徴候を現したのである。併し何といふても二人の關係は卵時代で極めて取りとめがない。人に見られて見苦しい様なこともせず、顧みて自ら疚ましい様なこともせぬ。従つてまだまだ暢氣なもので、人前を繕らふと云ふ様な心持は極めて少なかつた。僕と民子との關係も、此位でお終ひになつたならば、十年忘れられないといふ程にはならなかつたらうに。

親といふものは何處の親も同じで、吾子をいつまでも兒供のやうに思ふてゐる。僕の母なども其一人に漏れない。民子は其後時折僕の書室へや

つてくるけれど、餘程人目を計らつて氣ばねを折つてくる様な風で、いつきても少しも落着かない。先に僕に厭味を云はれたから仕方なしにくるかとも思はれたが、それは間違つてゐた。僕等二人の精神状態は二三日と云はれぬ程著しき變化を遂げてゐる。僕の變化は最も甚しい。三日前には、お母さんが叱れば私が科を背負ふから遊びにきてとまで無茶を云ふた僕が、今日は迎てもそんな譯のものでない。民子が少し長居をすると、もう氣が咎めて心配でならなくなつた。

民さん又お出でよ。餘り長く居ると人がつまらぬことを云ふから、民子も心持は同じだけれど、僕にもう行けと云はれると妙にすねだす。

アレあなたは先日何と云ひました。人が何と云つたつてよいから遊びに來いと云ひはしませんか。私はもう人に笑はれてもかまいませんの。

困つた事になつた。二人の關係が密接する程、人目を恐れてくる。人目を恐れる様になつては、最早罪惡を犯しつゝあるかの如く、心もおど／＼するのであつた。母は口でこそ、男も女も十五六になれば兒供ではないと云つても、それは理窟の上のこと、心持ではまだまだ二人を丸で兒供の様に思つてゐるから、其後民子が僕の室へきて本を見たり話をしたりしてゐるのを、直ぐ前を通りながら一向氣に留める様子もない。此間の小言も實は嫂が言ふから出たまで、ほんとうに腹から出た小言ではない。母の方はさうであつたけれど、兄や嫂やお増などは、盛に陰言をいふて笑つてゐたらしく、村中の評判には、二つも年の多いのを嫁にする氣が知らむなど、専らいふてゐるとの話。それやこれやのことが薄々二人に知れたので、僕から言ひだして當分二人は遠ざかる相談をした。

人間の心持といふものには不思議なもの。二人が少しも隔意なき得心上の相談であつただけれど、僕の方から言ひ出した許りに、民子は妙に鬱ぎ込んで、丸で元氣がなくなり、悄然としてゐるのである。それを見る僕もまた溜らなく氣の毒になる。感情の一進一退はこんな風にもつれ

つゝ危くなるのである。兎に角二人は表面だけは立派に遠ざかつて四五日を経過した。

陰曆の九月十三日夜が豆の月だといふ日の朝、露霜が降りたと思ふほどつめた。其替り天氣はきら／＼してゐる。十五日が此村の祭り、明日は宵祭といふ譯故、野の仕事も今日一渡り極りつけねばならぬ所から、家中手分けをして野へ出る事になつた。それで甘露の恩命が僕等兩人に下つたのである。兄夫婦とお増と外に男一人とは中稻の刈残りを是非刈つて終はねばならぬ。民子は僕を手傳ひとして山畑の棉を探つてくる事になつた。これは固より母の指圖で誰にも異議は云へない。

マアあの二人を山の畑へ遣るつて、親といふものはよッぽお目出度いものだ。

奥底のないお増と意地曲りの嫂とは口を揃へてさう云つたに違ひない。僕等二人は固より心の底では嬉しいに相違ないけれど、此場合二人で山畑へゆくとなつては、人に顔を見られる様な氣がして大に極りが悪い。義理にも進んで行きたがる様な素振りには出來ない。僕は朝飯前は書室を出ない。民子も何か愚圖々々して仕度もせぬ様子。もう嬉しがつてと云はれるが口惜しいのである。母は起てきて、

政夫も仕度しろ。民子もさつさと仕度して早く行け。二人でゆけば一日には樂な仕事だけれど、道が遠いだから、早く行かないと歸りが夜になる。成たけ日の暮れない内に歸つてくる様によ。お増は二人の辨當を拵らへてやつてくれ、お茶はこれこれの物で……

まことに親のこゝろだ。民子に辨當を拵らへさせては、自分のであるから、お茶などはロクな物を持つて行かないと氣がついて、ちゃんとお増に命じて拵らへさせたのである。僕はズボン下に足袋裸足藁藁帽といふ出で立ち、民子は手指を佩いて股引も佩いてゆけと母が云ふと、手指許り佩いて股引佩くのぐ／＼してゐる。民子は僕のところへきて、股引佩かないでもよい様にお母さんにさう云つてくれと云ふ。僕は民さん

がさう云つてくれへと云ふ。押問答をしてゐる内に、母はきゝつけて笑ひながら、

民やば町場者だから、股引佩くのは極りが悪るいかい。私は又お前が柔かい手足へ、茨や薄で傷をつけるが可哀想だから、さう云つたんだが、いやだと云ふならお前のすきにするがよいさ。

それで民子は、例の襷に前掛姿で麻裏草履といふ仕度。二人が一斗箆一個宛を持ち、僕が別に番ニヨ片籠と天秤とを肩にして出掛ける。民子が跡から菅笠を被つて出ると、母が笑聲で呼びかける。

民やお前が菅笠を被つて歩くと、丁度木の子が歩くやうで見つともない。網笠がよからう。新しいのが一つあつた筈だ。

稻刈運は出てしまつて別に笑ふものもなかつたけれど、民子は遽はて、菅笠を脱いで、顔を赤くしたらしかつた。今度は網笠を被らずに手に持つて、それやお母さんいつてまゐりますと挨拶して走つて出た。

村のものらも彼はいふと聞いてるので、二人揃ふてゆくも人前耻かしく、急いで村を通り抜けやうとの考から、僕は一足先になつて出掛ける。村はづれの坂の降口の大きな銀杏の樹の根で民子のくるのを待つた。こゝから見おろすと少しの田圃がある。色よく黄ばんだ晩稻に露をおんで、シツトリと打伏した光景は、氣のせいも殊に清々しく、胸のすくやうな眺めである。民子はいつの間にか來てゐて、昨日の雨で洗ひ流した赤土の上に、二葉三葉銀杏の葉の落ちるのを拾つてゐる。

民さんもうきたかい。此天氣のよいことどうです。ほんとに心持のよい朝だね。

ほんとに天氣がよくて嬉しいは。このまゝ銀杏の葉の綺麗なこと。

さゝ出掛けましょう。

民子の美くしい手で持つてると銀杏の葉も殊に綺麗に見える。二人は坂を降りて漸く究屈な場所から廣場へ出た氣になつた。今日は大きいそぎで棉を探り片付け、さんざん面白いことをして遊ぼうなどと相談しながら歩く。道の真中は乾いてゐるが、兩側の田についてある所は、露にしと

く濡れて、いろくの草が花を咲いてる。タウコギは未枯れて、水蕎麥藪など一番多く繁つてゐる。都草も黄色く花が見える。野菊がよろ／＼と咲いてゐる。民さんこれ野菊がと僕は吾知らず足を留めたけれど、民子は聞えないのかさつさと先へゆく。僕は一寸脇へ物を置いて、野菊の花を一握り採つた。

民子は一町ほど先へ行つてから、氣がついて振り返るや否や、あれつと叫んで駆け戻つてきた。

民さんはそんなに戻つてきないッだつて僕が行くものを……

まゝ政夫さんは何をしてゐたの。私びつくりして……まゝ綺麗な野菊、政夫さん私に半分おくれつたら、私ほんとうに野菊が好き。

僕はもとから野菊がだい好き。民さんも野菊が好き……

私なんでも野菊の生れ返りよ。野菊の花を見ると身振ひの出るほど好もしひの。どうしてこんなかと、自分でも思ふ位。

民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のやうな人だ。

民子は分けてやつた半分の野菊を顔に押しあて、嬉しがつた。二人は歩きたす。

政夫さん……私野菊の様だつてどうしてですか。

さゝどうしてといふことはないけど、民さんは何がなし野菊の様な風だからさ。

それで政夫さんは野菊が好きだつて……

僕大好きさ。

民子はこれからはあなたが先になつてと云ひながら、自らは後になつた。今の偶然に起つた簡単な問答は、お互ひの胸に強く有意味に感じた。民子もさう思つた事は其素振り解る。茲まで話が迫まると、もう其先を言ひ出すことは出来ない。話は一寸途切れてしまつた。何と言つても幼ない兩人は、今罪の神に鬪弄せられつゝあるのであれど、

野菊の様な人だと云つた詞について、其野菊を僕はだいい好きだと云つた時すら、僕は既に胸に動氣を起した位で、直ぐにそれ以上を言ひ出すほどに、まだくずくしくはなつてゐない。民子も同じこと、物に突きあたつた様な心持で強くお互に感じた時に聲はつまつてしまつたのだ。二人は暫く無言で歩く。

眞に民子は野菊の様な兒であつた。民子は全くの田舎風ではあつたが、決して粗野ではなかつた。可憐で優しくてさうして品格もあつた。厭味とか憎氣とかいふ所は爪の垢ほどもなかつた。どう見ても野菊の風だつた。

暫くは黙つてゐたけれど、いつまで話もしないでゐるは猶をかしひ様に思つて、何か話を仕様と苦心した結果、

民さんはさつき何を考へてあんなに脇見もしないで歩いてゐたの。

わたし何も考へてゐやしません。

民さんはそりや嘘だよ。何か考へごともしなくてあんな風をする譯はないさ。どんなことを考へてゐたのかわらないけれど、隠さな

いだつてよいぢやないか。
政夫さん濟まない。私さつきほんとに考事してゐました。私つくづく考へて情なくなつたの。わたしはどうして政夫さんよか年が多いんでせう。私は十七だと言ふんだもの、ほんとに情なくなるは：

.....
民さんは何のこと言ふんだらう。先に生れたから年が多い、十七年育つたから十七になつたのぢやないか。十七だから何で情ないので。僕だつて、さ來年になれば十七歳さ。民さんはほんとに妙なことを云ふ人だ。

僕も今民子が言つたことの心を解せぬほどの兒供でもない。解つてはゐるけど、わざと戯れの様に聞きなして、振りかへつて見ると、民子は眞に考へ込んでゐる様であつたが、僕と顔合せて極りわるげに遽に側を向

いた。

かうなつてくると何をいふても、直ぐそこへ持つてくるので話がゆきつまつてしまふ。二人の内どちらか一人が、すこしほんの僅かにても押が強ければ、こんなに話がゆきつまるのではない。お互に心持は奥底まで解つてゐるのだから、吉野紙を突破するほどにも力がありさへすれば、話の一步を進めてお互に開放してしまふことが出来るのである。乍併真底からをぼこな二人は、其吉野紙を破るほどの押しがないのである。又玆で話の皮を切つてしまはねばならぬと云ふ様な、ハツキリした意識も勿論ないのだ。言はず未だ取止めのない卵的の戀であるから、少しく心の力が必要な所へくると話がゆきつまつてしまふのである。

お互に自分で話し出しては自分が極りわるくなる様なことを繰返しつゝ、幾町かの道を歩いた。詞數こそ少くなけれ、其詞の奥には二人共に無量の思ひを包んで、極りがわるい感情の中には何とも云へない深き愉快を湛へて居る。それで所謂足も空に、いつしか田圃も通りこし、山路へ這入つた。今度は民子が心を取り直したらしく鮮かな聲で、

政夫さんもう半分道來ましてせうか。大長柵へは一里に遠いッて云ひましたねい。

さうです一里半には近いさうだが、もう半分の餘來ましたらうよ。少し休ませうか。

わたし休まなくとも、ようございませうが、早速お母さんの罰があたつて、薄の葉でこんなに手を切りました。ちよいとこれで結はへて下さいな。

親指の中指で疵は少しだが、血が意外に出た。僕は早速紙を裂いて結はへてやる。民子が兩手を赤くしてゐるのを見た時非常にかはいさうであつた。こんな山の中で休むより、畠へ往つてから休まうといふので、今度は民子を先に僕が後になつて急ぐ。八時少し過ぎと思ふ時分に大長柵の畠へ着いた。

十年許前に親父が未だ達者な時分、隣村の親族から頼まれて餘儀なく買

つたのださうで、畠が八反と山林が二町ほど茲にあるのである。此邊一體に高臺は皆山林で其間の柵が畑になつて居る。越石を持つてゐると云へば、世間體はよいけど、手間許り掛つて割りに合はないといつても母が言つてる畑だ。

三方林で圍まれ、南が開いて餘所の畑とつゞいてゐる。北が高く南が低い傾斜になつてゐる。母の推察通り、棉は末にはなつてゐるが、風が吹いたら溢れるかと思ふほど棉はゑんでゐる。點々として畑中白くなつてゐる其棉に朝日がさしてゐると目ぶしい様に綺麗だ。

まアよくゑんでること。今日採りにきてよい事しました。

民子は女だけに、棉の綺麗にゑんでるのを見て嬉しさうにさう云つた。

畑の眞中程に桐の樹が二本繁つてゐる。葉が落掛けて居るけれど、十月の熱を凌ぐには充分だ。茲へあたりの黍殻を寄せて二人が陣どる。辨當包みを枝へ釣る。天氣のよいのに山路を急いだから、汗ばんで熱い、着物一枚づゝ脱ぐ。風を懐へ入れ足を展して休む。青きつた空に翠の松林、百舌も何處かで鳴いてゐる。聲の響くほど山は静かなのだ。天と地との間で廣い畑の眞中に二人が話をしてゐるのである。

ほんとに民子さんけふといふけふは極樂の様な日ですねい。

顔から頸から汗を拭いた跡のつやつやしき、今更に民子の横顔を見た。

さうですねいわたし何だか夢の様な気がするの。今朝家を出る時はほんとに極りが悪くて……嫂さんには變な眼つきで視られる、お増には冷かされる、私はのぼせてしまひました。政夫さんは平氣でゐるから憎らしかつたは。

僕だつて平氣なもんですか。村の奴らに逢うのがいやだから、僕は一足先に出て銀杏の下で民さんを待つてゐたんでさア。それはさうと、民さん、今日はほんとに面白く遊ばうね。僕は來月は學校へ行くんだし、今月とて十五日しかかないし、二人でしじみ話の出来る様なことは是から先は六つかしい。あはれッばいこと云ふやうだけど、二人の中も今日だけか知らと思ふのよねい民さん……

そりやア政夫さん私は道々それ許考へて來ました。私がさつき、ほんとに情なくなつてと言つたら、政夫さんは笑つておしまひなしたけど……

面白く遊ばう言ふても、話を始めると直ぐにかうなつてしまふ。

民子は涙を拭ふた様であつた。丁度よくそこへ馬が見えてきた。西側の山路から、がさがさ笹にさはる音がして、薪をつけた馬を引いて頼冠の男が出て來た。能く見ると意外にも村の常吉である。此の奴はいつか向ふのお濱に民子を遊びに連れだしてくれと頻りに頼んだといふ奴だ。いやな野郎がきやがつたなと思ふてゐると、

や政夫さんコンチャどうも結構なお天氣ですな。今日は御夫婦で棉採りかな。洒落れますね。アハ、ハ、ハ、ハ、

オウ常さん今日は駄賃かな。大變早く御精が出ますね。

ハア吾々なんざア駄賃取りでもして適に一盃やるより外に樂みもないんですからな。民子さんいやに見せつけますね。餘り罪ですぜ。アハ、ハ、ハ、ハ、

此野郎失敬なと思つたけれど、吾々も餘り威張れる身でもなし、笑ひとほけて常吉をやり過ごした。

馬鹿野郎實に厭なやつだ。さア民さん始めませう。ほんとに民さん元氣をお直しよ。そんなにくよくよおしでないよ。僕は學校へ行つたて千葉だもの、盆正月の外にも來やうと思へば土曜の晩かけて日曜に來られるさ……

ほんとに濟みません泣面などして。あの常さんて男、何といふいやな奴でせう。

民子は襷掛け僕はシャツに肩を脱いで一心に採つて三時間許の間に七分通片づけてしまつた。もう跡はわけがないから辨當にしやうといふことにして桐の蔭に戻る。僕はかねて用意の水筒を持つて、

民さん、僕は水を汲んで來ますから、留守番を頼みます。歸りに「えびづる」や「あけび」をうんと土産に採つて來ます。

私は一人で居るのはいやだ。政夫さん一所に連れてつて下さい。さつきの様な人にも來られたら大變ですもの。

だつて民さん、向ふの山を一つ越して先ですよ清水のある所は。道といふ様な道もなく、そこそそ茨や薄で足が疵だらけになりますよ。水がなくなちや辨當が食られないから、困つたなア民さん待つてゐられるでせう。

政夫さん後生だから連れて行つて下さい。あなたが歩ける道なら私にも歩けます。一人で茲にゐるのはどうしてもいやだ。

民さんは山へ來たら大變だ、ッ兒になりました。それぢや一所に行きませう。

辨當は棉の中へ隠し、着物はてんでに着てしまつて出掛る。民子は頻りに、にこ／＼してゐる。端から見たならば、馬鹿々々しくも見苦しくもあらうけれど、本人同志の身にとつては、其らちもなき押問答の内にも限りなき嬉しみを感ずるのである。高くもないけど道のない所をゆくのであるから、笹原を押分け樹の根につかまり、崖を攀づる、屢々民子の手を採つて曳てやる。

近く二三日以來の二人の感情では、民子が求めるならば僕はどんなことでも拒まれない。又僕が求めるなら矢張どんなことでも民子は決して拒みはしない。さういふ間柄でありつゝも、飽くまで臆病に飽くまで氣の小さな兩人は、嘗て一度も有意味に手などを採つたことはなかつた。然るに今日は偶然の事から屢々手を採り合ふに至つた。這邊の一種云ふべからざる愉快な感情は經驗ある人にして始めて語ることが出来る。

民さん茲までくれば、清水はあすこに見えます。是から僕が一人で行つてくるから茲に待つて居なさい。僕が見えて居たら居られるでせう。

ほんとに政夫さんの御厄介ですね……そんなにだゝを言つては濟まないから、茲で待ちませう。あらア野葡萄キイチブがあつた。

僕は水を汲んでの歸りに、水筒は腰に結びつけ、あたりを少許探つて、

「あけび」四五十と野葡萄一もくさを採り、龍膽の花の美くしいのを五六本見つけて歸つてきた。歸りは下りだから無造作に二人で降りる。畑へ出口で僕は春蘭の大きいのを見つけた。

民さん僕は一寸と「アックリ」を掘つてゆくから、此「あけび」と「えびづる」を持つて行つて下さい。

「アックリ」て何に。あらア春蘭ぢやありませんか。

民さんは町場もんですから、春蘭など、品のよいこと仰しやるのです。矢切の百姓なんぞは「アックリ」と申しまして輝の薬に致します。ハ、ハ、ハ、

あらア口の悪いこと。政夫さんは、けふはほんとに口が悪くなつたよ。

山の辨當と云へば、土地の者は一般に樂みの一つとしてある。何か生理上の理由でもあるか知らんが、兎に角、山に仕事をしてやがてたべる辨當が不思議とうまいことは誰も云ふ所だ。今吾々二人は新らしき清水を汲み來り母の心を籠めた大辨當を分けつゝたべるのである。興味の尋常でないと言ふも愚な次第だ。僕は「あけび」を好み民子は野葡萄をたべつゝ暫く話をする。民子は笑ひながら、

政夫さんは輝の薬に「アックリ」とやらを採つてきて學校へお持ちになるの。學校で輝がきれいたらをかしいでせうね……

僕は眞面目に、

なアこれはお増にやるのさ。お増はもう遠に輝を切らしてゐるでせう。此間も湯に這入る時にお増が火を焚ききて非常に輝を痛がつてゐるから、其内に僕が山へ行つたら「アックリ」を採つてきてやると言つたのさ。

まアあなたは親切な人ですことね……お増は陰日向のない憎氣のない女ですから、私も仲好くしてゐたんですが、此頃は何となし私に突き當る様な事ばかり言つて、何でもわたしを憎んでゐますよ。

アハ、それはお増どんが焼餅をやくのでさ。つまらんことにもすぐ焼餅を焼くのは、女といふものゝ癖さ。氣にとめることはないよ。僕がそら「アツクリ」を採つていつてお増にやると云へば、民さんがすぐに、まアあなたは親切な人とか何と云ふのと同じ譯さ。

此人はいつのまにこんなに口がわるくなつたのでせう。何を言つても政夫さんにはかないやしない。いくら私だつてお増が根も底もない焼もちだ位は承知してゐますよ……

實はお増も不憫な女よ。両親があんなことになりさへせねば、奉公人とまでなるのではない。親父は戦争で死ぬ、お袋は之れを嘆いたがもとでの病死、一人の兄がはづれものといふ譯で、とう／＼あの始末。國家の爲に死んだ人の娘だもの、民さんいたはつてやらねばならない。あれでも民さんあなたをば大變ほめてゐるよ。意地曲りの嫂にこきつかはれるのだから一層かはいさうでさ。

そりゃ政夫さん私もさう思つて居ますさ。お母さんも能くさうおっしゃいました。つまらないものですけど何とかかとか分けてやつてますが、又政夫さんの様に情深くされると……

民子は云ひさして又話を詰まらしたが、桐の葉に包んで置いた龍膽の花を手探つて、急に話を轉じた。

こんな美しい花、いつ採つてお出でなして。りんどうはほんとによい花ですね。わたしりんどうがこんなに美しいとは知らなかつたわ。わたし急にりんどうが好きになつた。おオエエ花……

花好きな民子は例の癖で、色白の顔に其の紫紺の花を押しつける。やがて何を思ひだしてか、ひとりでにこにこ笑ひだした。

民さんなんですそんなにひとりて笑つて。

政夫さんひとりんどうの様な人だ。

どうして。
さアどうしてといふことはないけど、政夫さんは何がなし龍膽の様な風だからさ。

民子は言ひ終つて顔をかくして笑つた。

民さんも餘程人が悪くなつた。それでさつき仇討といふ譯ですか。口眞似なんか恐入りますナ。併し民さんが野菊で僕が龍膽とは面白い對ですね。僕は悦んでりんどうになります。それで民さんがりんどうを好きになつてくれれば猶嬉しい。

二人はこんならちもなき事いふて悦んでゐた。秋の日足の短さ、日は漸く傾きそめる。さアとの掛聲で棉もぎにかゝる。午後の方は僅であつたから一時間半許りでもぎ終へた。何やかやそれれまとめて番二に乘坐、二人で差しあひにかつぐ。民子を先に僕が後に、とぼ／＼畑を出掛けた時は、日は早く松の梢をかぎりかけた。

半分道も來たと思ふ頃は十三夜の月が、木の間から影をさして尾花にゆらぐ風もなく、露の置きさへ見える様な夜になつた。今朝は氣がつかなかつたが、道の西手に一壇低い畑には、蕎麥の花が薄絹を曳き渡したやうに白く見える。こほろぎが寒げに鳴いてゐるにも心とめずにはゐられない。

民さんくたぶれたでせう。どうせおそくなつたんですから、此景色のよい所で少し休んで行きまじやう。

こんなにおそくなるなら、今少し急げばよかつたに。家の人達に屹度何とか言はれる。政夫さん私はそれが心配になるは。

今更心配しても追つかないから、まア少し休みませう。こんなに景色のよいことは滅多にありません。そんなに人に申譯のない様な悪いことはしないもの、民さん心配することはないよ。

月あかりが斜にさしこんでゐる道端の松の切株に二人は腰をかけた。目の先七八間の所は木の蔭で薄暗いが、それから向ふは畑一ばいに月がさして、蕎麥の花が際立つて白い。

何といふえい景色でせう。政夫さん歌とか俳句とかいふものをやつたら、こんなときに面白いことが云へるでせうね。私ら様な無筆でもこんな時には心配も何も忘れましますもの。政夫さんあなた歌をおや